

日本の「いまそこにある危機」北朝鮮

シリーズ

日本が危ない!

今春に米本土攻撃可能
平昌五輪後が正念場に

北朝鮮が米本土まで核攻撃できる能力を獲得するのは「今春」。残された時間は「数カ月」もない。そうした認識が米政府高官から相次いでいる。朝鮮半島情勢が緊迫度を増す中、隣国韓国は北朝鮮との対話に傾斜している。平昌五輪・パラリンピックが終了する3月18日以降、朝鮮半島情勢は風雲急を告げそうだ。

昨年暮れから米国内では「Bloody nose」作戦という言葉が語られるようになった。

「北朝鮮の鼻っ面を叩く」—そんなイメージからこの「ブラッディ・ノーズ」、日本語でいうと「鼻血パンチ」作戦が出てきた。北朝鮮の核・弾道ミサイル施設に対する限定的な空爆を指す。

これとタイミングを合わせるかのように、注目すべき発言が米政府高官から出ている。2月6日のことだ。軍縮大使、ロバート・ウッドは国連の軍縮会議で、北朝鮮が核弾頭を搭載した弾道ミサイルで米本土を攻撃することが可能となるのは「あと数カ月」との見方を示した。

同様の認識を示したが米中央情報局(CIA)長官のマイク・ポンペオ。1月下旬のワシントンのシンポジウムで、北朝鮮が米本土を攻撃できる能力を獲得するまで「かつてなく近づいている」と述べ、残された時間は同じく「数カ月」との認識を示した。

今年に入るまで、国際社会は北朝鮮の核・弾道ミサイル開発に対する危機感の高まりから、制裁措置を強化してきた。そうした努力に水を差したのが平昌五輪の主催国・韓国だった。ウッドは「お色気攻勢には誰も騙されない」と警告したが、韓国には届いていないようだ。

むしろ北朝鮮の「お色気外交」にすっかりはまっている。平昌五輪には北朝鮮の芸術団が貨客船「万景峰(マンギョンボン)92」でやってきてコンサートを開催したほか、アイスホッケー女子では南北合同チームが結成された。韓国大統領、文在寅は朝鮮労働党委員長、金正恩の妹、金与正と9日の開会式で満面も笑みで握手を交わしたほか、翌10日には昼食を共にし、早期の訪朝を要請された。

文は首相、安倍晋三との会談でも表向きは日米韓の連携を確認しながらも、「平昌五輪を機に、北朝鮮の核問題を解決し、朝鮮半島に恒久的な平和を定着させるための糸口をつかむよう努力している」と述べ、対話重視の姿勢を鮮明にした。

対する安倍は「五輪後が正念場だ」との認識を示した。安倍は米副大統領、マイク・ペンスと東京に続き平昌でも会談し、韓国が宥和姿勢に傾斜するなかで、いかに北朝鮮に対処するかを協議した。

米に対北朝鮮3つのシナリオ 第1、北の核放棄は非現実

ペンスは韓国滞在中、北朝鮮との接触を一切拒否し、代わりに脱北者らと会うなど、妥協しない姿勢を明確に示した。北朝鮮の核保有のタイムリミットを「春」をみているなか、誤ったメッセージを飛ばしたくなかったという。では、「そのとき」に向けて、どのような事態が想定されるのか。考えられるシナリオは3通りだ。

まず第一に、北朝鮮が国際社会の圧力に屈して、核や弾道ミサイル開発を放棄する、あるいは中断するというもの。もっとも、これは考えづらい。金正恩は1月1日に朝鮮中央テレビを通じて放送された新年の演説で「米本土全域がわが国の核攻撃射程範囲内にある。核のボタンが私の机の上にも置かれているという脅迫ではない。現実である」「われわれはどんな力をもってしても、元に戻すことはできない戦争抑止力を持った」と言い放った。そんな金が核をみすみす手放すはずがない。

二番目に考えられるのが、米軍による核施設の攻撃だ。これが「ブラッディ・ノーズ」で、圧倒的な軍力を持って北朝鮮の核を無力化しようという作戦である。米政権が真剣にこの作戦を検討していることを示す「証拠」がある。駐韓大使にほぼ決まっていたとみられていた米シンクタンク戦略国際問題研究所(CSIS)の韓国部長で、ジョージ・タウン大教授のピクチャー・チャの内定取り消しだ。

チャは1961年にニューヨークで生まれた。コロンビア大やオックスフォード大で学び、2004年から2007年までジョージ・ブッシュ(息子)政権で国家安全保障会議(NSC)アジア部長を務め、北朝鮮の核問題をめぐる六カ国協議を担当した。

チャは韓国系とはいえ、生まれが韓国だった元駐韓大使、ソン・キムとは異なり、母国語が英語で、韓国人記者と話すときも英語を使う。ブッシュ政権で北朝鮮との核合意に走った元国務次官補のクリストファー・ヒルのような宥和派でもない。むしろ、北朝鮮の人権問題などを厳しくみてきた人物だ。

第2シナリオは核施設攻撃 鼻血作戦決行へ反対派排除

そのチャが「鼻血作戦」に反対する理由は、北朝鮮が反撃した場合、韓国国内だけでなく日本にいる米国人を安全に避難させることができるか疑問視しているからだ。

平昌五輪に出場する北朝鮮選手の概要

アイスホッケー(女子)	12人が韓国チームに合流	世界ランキング25位(韓国は22位)
フィギュアスケート(ペア)	リョム・テオク(女) キム・ジュシク(男)	世界選手権15位。自力で五輪出場権を獲得
ショートトラック	チェ・ウンソン(男) チョン・ガンボム(男)	2017~18シーズンW杯500m90位、札幌冬季アジア大会8強 経歴不明
クロスカントリー	ハン・チュンギョン(男) パク・イル Chol(男) リ・ヨングム(女)	17年、ロシアの国際大会で92人中90位 同最下位 同大会で83人中最下位
アルペン	チェ・ミンギョン(男) キム・リョンヒャン(女) カン・ソンイル(男)	昨年3月のイラン国際大会が近年唯一の出場か 同。世界ランキング1910位 6年前のジュニア時代の記録のみ

※韓国紙報道などから

チャの内定取り消しはトランプ政権が「鼻血作戦」を真剣に検討している段階に入っていることを示しているが、さらに、注目すべき動きが米国内で起きている。これを指摘したのが、元航空自衛隊航空支援集団司令官の織田邦男だ。

織田はワシントンで話題の中心となっている大統領首席補佐官ジョン・ケリーの辞意騒動と北朝鮮情勢を結び付けた。ケリーはドメスティックバイオレンス、いわゆるDVの疑いが浮上して秘書官を辞任したホワイトハウスのロバート・ポーターの問題に関する対応で批判を浴び、トランプも更迭を検討していると米メディアで取りざたされている。

織田は自身のフェイスブックに次のように書き込んだ。

「このニュースは深読みする必要がある。トランプ政権の大黒柱の一人がこんな理由で辞意をもらすはずがない。もし『辞意』が本当なら、これはトランプが『鼻血作戦』を決心したということかもしれない。トランプが決心すれば、職を賭してこれに反対してきたケリーは当然、辞めることになる。辞める理由としては、『鼻血作戦』のことなど言及できないから、これくらいの理由がちょうどいい」
元海兵隊大将で前任は国土安全保障長官だったケリー、国防長官で元海兵隊大将のジェームズ・マティス、大統領補佐官(国家安全保障問題担当)で現役の陸軍中將、ヒューバート・レイモンド・マクマスターは「ジェネラルズ」、あるいは「將軍3人組」と呼ばれ国内外の尊敬を集めてきた。ケリーは型破りなトランプ政権に軍の規律、忠誠心を植えこんできた。にもかかわらず、今回のポーター騒動がおき窮地に立たされている。

在韓米国人25万人の安全性 鼻血作戦など攻撃に選択肢

では、マティスはどうか考えているか。マティスは1月、ハワイにある米太平洋軍司令部で、韓国国防相の宋永武に対して「五輪をめぐる対話だけでは対応できない」と、韓国の宥和姿勢にクギを刺したのだった。もちろん、軍人のマティスは軍事のことは知らないトランプと異なり、戦争の怖さも十分知り尽くしている。

軍事攻撃には慎重であるが、同時に昨年秋には「ソウルを重大な危険にさらさず、北朝鮮に対して軍事的な対応が可能だ」と述べている。この認識が「ブラッディ・ノーズ作戦」につながったのであろうが、果たして韓国国内にいる数多くの民間人の犠牲をなくして攻撃を遂行できるのか。韓国には米市民や軍人家族ら25万人弱が滞在しているといわれている。日本人も6万人程度がいてみられている。

マティスはどのようにしようと考えているのか。過去の彼の発言からみると、昨年8月には国務長官レックス・ティラーソンとともに米紙ウォール・ストリート・ジャーナルに寄稿し、これまでのバラク・オバマ政権

平昌五輪をめぐる韓国を翻弄する北朝鮮の主な動き

1月15日	北朝鮮側が、芸術団派遣で板門店を通して韓国入りすることを要請
17日	北朝鮮南東部での合同文化行事開催などで合意
19日	北朝鮮が事前視察団を韓国に送ると通知
同日夜	視察団の派遣の中止伝達
20日	中止から一転、再度21日の訪韓を通達
23日	北朝鮮が芸術団が板門店とは違う陸路で韓国入りすると変更
29日	北朝鮮が文化行事の中止を一方向的に通告。発電用の軽油提供も求めた
2月5日	北朝鮮側から芸術団の本隊が万景峰92で韓国に到着する連絡があったことが判明
6日	万景峰92が韓国に到着予定

6日に韓国に到着する予定の万景峰92



のような北朝鮮に対する「戦略的忍耐」は失敗であり、軍事手段に支えられた外交努力を中心とする主張した。

さらに、北朝鮮の体制変換は求めないとも語り、金正恩を殺害するいわゆる「斬首作戦」を否定した。同時に、朝鮮半島の統一も求めないとした。

2人は北朝鮮に対し、交渉に応じるよう促したが、北朝鮮は9月に入って6度目の核実験を行い、聞く耳を持たない姿勢を示した。そこでマティスは「殲滅は考えていないが、そうできる数多くの選択肢がある」と軍事攻撃に踏み切る姿勢をにじませた。

第3のシナリオ、北の核容認 米安全・日本脅威にどう対応

マティスのいうように民間人に被害なく先制攻撃ができればいいが、次なるハードルはトランプが実際に決断するかだ。3番目のシナリオはトランプはとてもしも攻撃に踏み切ることはできないとし、米国が北朝鮮の核を容認するというという予測だ。すでにこうした考えを出している元米政府高官もいる。

オバマ政権で大統領補佐官(国家安全保障問題担当)を務めたスーザン・ライスは昨年8月10日付米紙ニューヨーク・タイムズへの寄稿で「必要であれば、われわれは北朝鮮の核兵器を容認できる」と、北朝鮮の核容認論を唱えた。ライスは「歴史的に見れば、冷戦時代に旧ソ連の何千という核兵器の脅威を容認したのと同様だ」とし、米国を攻撃さえしなければ、北朝鮮が核兵器を保有していてもいいとの驚くべき認識を示した。

ライスはもちろんトランプ政権への影響力はない。それでも、内政に忙殺され、外交ではエルサレム問題でイスラエルの首都として認定すると大きく舵を切ったトランプが北朝鮮の核問題に対応するのは無理との見方も強い。

仮に米国が北朝鮮の核を容認し、日本にも「核の傘」を提供するから同調するように言うてくるような事態になったら安倍はどうするのか。唯々諾々と従うのか。否。どうして認めることはできない。では日本独自で何ができるのか。

国会では野党がいまだに森友学園をめぐる問題に固執しているが、日本が直面している事態にどのように向き合うか真剣に議論をするべきときがある。残された時間は多くない。シナリオ2にしる3にしる、日本の安全に重大な影響を及ぼすことは間違いない。われわれは戦後初めて「いまそこにある危機」に正面から向き合わないといけないのだ。(敬称略)